三重県埋蔵文化財調査報告 137

多気遺跡群発掘調査報告III

～ 一志郡美杉村上多気字小津所在、伝誉永寺跡・伝本願寺跡の調査 ～

１９９６．３

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢の国のなかでも山間部に位置している美杉村には、数多くの秘められた文化財が眠っているといわれています。そのなかでも、上多気・下多気地区には著名な「北畠氏館跡庭園」があり、全国から観光客が訪れています。

この上多気・下多気は、かつては2地区を含めて「多気」と呼ばれた地域で、南北朝時代から戦国時代にかけての大名・北畠氏が本拠地を置いたところであります。北畠氏は中・南伊勢を中心に、南伊賀さらには大和宇陀地域までをも何らかのかたちで支配していた大名であります。そのような点からすれば、当地は、いわば当時の北畠氏支配地域内の中心として存在していたものとも言えるもので、その歴史的価値はとても高いものであるといえるでしょう。

上多気・下多気には、現在もいくつかの北畠氏時代の旧跡をみることができますが、開発は少なく、それに先立つ発掘調査の機会もあまりありませんでした。自然に満ちあふれた落ち着いた景観を保持しています当地は、そのためもあって交通事情は決して良くはなく、早急な交通網整備が望まれていました。特に、今回の発掘調査は国道422号線の災害復旧工事に先立って行われたもので、早急な調査が要望されていたものであります。

今回の調査は狭い面積でした。しかし、それでも多気の、ひいては北畠氏の歴史学的な解明のためにも重要な成果が得られました。多気盆地の最奥部まで北畠氏の時代に生活が営まれていたことは、とりもなおさず、多気のかつての繁栄の証といえましょう。この調査によって得られました成果をひとつの契機として、北畠氏が形成した「都市遺跡」への関心が高まって、文化財保護の重要さを考えて頂ければと思います。

調査に際しましては、地元上多気の方々、美杉村教育委員会、県土木部道路建設課・久居土木事務所の関係各位から、多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に、心からの御礼を申し上げます。

1996年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長　川村政敬

例　　言

1　本書は、国道422号線道路災害復旧工事に伴い緊急発掘調査を実施した美杉村上多気字小津地区に所在する伝誉永寺跡・伝本願寺跡の発掘調査報告書である。

2　今回調査した地区は、縄文時代の遺跡であるヨヘイ遺跡のほか、室町～戦国時代にかけての大名である北畠氏が関係して整備したと考えられる都市遺跡の一部を構成している伝誉永寺跡・伝本願寺跡が所在している。これらは、ヨヘイ遺跡とは全く別の遺跡として把握されねばならないものである。したがって、今回はこれらの遺跡の総称として「多気遺跡群」と呼称している。

3　調査は、平成７年６月と８月に実施した。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査第１課　技師　　伊藤裕偉

4　調査にあたっては、地元上多気・丹生俣の方々、美杉村教育委員会、および県土木部道路建設課・久居土木事務所からの協力を得た。

5　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第１課および管理指導課が行い、以下の方々の援助・協力を得た。写真の撮影、執筆および全体の編集は伊藤が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、井田美奈子、楠純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子

6　挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和62年）である。

7　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

8　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

なべ……「鍋」および「堝」があるが、「鍋」を用いた。

わん……「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

11　当報告書の遺構は、全て通し番号となっている。

12.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ　前　　言……1
　1　調査の契機……1
　2　調査の経過……1
　3　調査の方法……2

Ⅱ　位置と環境……3

Ⅲ　調査の成果 ― 層位と遺構 ― ……6
　1　基本層位……6
　2　伝誉永寺跡の遺構……6
　3　伝本願寺跡の遺構……6

Ⅳ　調査の成果 ― 出土した遺物 ― ……9
　1　縄文時代の遺物……9
　2　中世の遺物……9

Ⅴ　調査のまとめと検討……10
　1　縄文時代の遺構・遺物について……10
　2　中世の遺構・遺物について……10

付編　聖光寺境内出土の遺物について……11

　報告書抄録……13

写真図版目次

ＰＬ．1　伝誉永寺跡調査区　土層
ＰＬ．2　伝本願寺跡調査区　遠景他
ＰＬ．3　伝本願寺跡調査区　遺構１
ＰＬ．4　伝本願寺跡調査区　遺構２
ＰＬ．5　伝本願寺跡調査区　出土遺物
ＰＬ．6　聖光寺境内出土の遺物

挿 図 目 次

fig．1　多気周辺地形図……2
fig．2　遺跡周辺地形図……4
fig．3　調査区周辺地形図……5
fig．4　伝誉永寺跡調査区土層……7
fig．5　伝本願寺跡調査区平面・土層断面図及びＳＫ２平面・土層断面図……8
fig．6　伝本願寺跡調査区出土遺物……9
fig．7　聖光寺位置図……12
fig．8　聖光寺境内出土遺物……12

表 目 次

tab．1　伝本願寺跡出土遺物観察表……10
tab．2　聖光寺境内出土遺物観察表……12

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

国道422号線は、飯南町から名張市を経て上野市へと至る道である。美杉村地内では、かつての「伊勢本街道」にあたる国道368号線と上多気の地で交差する。美杉村地内での国道422号線とは、かつての「庄司峠越え」に相当する部分である。

この道路改良事業は、三重県内でも特に山間部といえるこの美杉村内のうち、丹生俣地内と上多気地内とを結ぶ幹線道に相当し、狭隘な道路であったため、早急な整備が必要とされてきたものである。

美杉村内に包蔵されている各種の重要な埋蔵文化財のうち、特に字上多気・下多気の存在する「多気」は、かつて伊勢から伊賀・大和の一部を領有していた大名・北畠氏が本拠地としていたところであり、県内でも有数の歴史的重要地域として大方の理解を得ている。今回発掘調査を行ったところも、その一部と理解される場所である。

2　調査の経過

a　伝誉永寺跡の調査について

今回の道路改良事業予定地内における埋蔵文化財については、「伝誉永寺跡」と「伝本願寺跡」の存在が認識されていた。このため、例年県の公共事業に対して行っている公共事業照会においても、埋蔵文化財包蔵地として県土木部へと通知を行っていた。平成７年度分の事業照会のなかでは、伝誉永寺跡・伝本願寺跡部分の約880㎡については、事前の試掘調査、あるいは本調査が必要なものとして回答している。

しかしそのなかで、平成６年９月に発生した台風の影響により、伝誉永寺跡と伝本願寺跡の境目付近の現道が土砂崩れにより崩壊するに至った。そこで当センターは、県土木部および久居土木事務所と協議のうえ、その迂回路として必要な部分について急遽立会調査を実施した。その結果、この迂回路部分については遺構の存在が認められなかったため、工事が行われることとなった。

平成７年度に至り、同じ多気地内にある上村地区の発掘調査を行っている際に当地の確認を行ったところ、迂回路とした部分よりもさらに南の部分での工事が着工されていることが判明した。工事による掘削のため、伝誉永寺跡相当部分の事業地内の大半が失われていた。そのため、急遽久居土木事務所と協議を行い、この工事に関する始末書を受理することで一致した。また、辛うじて残存している、旧庄司越えの街道として伝承されている部分の土層断面観察と、伝誉永寺跡北端部の土層図作成を行うこととなった。

b　伝本願寺跡の調査について

その後、前年度に発生した土砂崩れ部分の復旧工事が、安全上の問題から速やかに実施される必要が生じるに至った。そのため、再度久居土木事務所との協議を行い、まずは伝本願寺跡部分についての試掘調査を行うこととなった。試掘調査は平成７年７月20日に杉谷政樹を担当として行った。その結果、事業地内約460㎡については遺構・遺物の存在が確認され、本調査が必要となった。このうち、今回の災害復旧工事に伴い、どうしても事前の調査が必要となる部分について本調査を行うこととなった。

伝本願寺跡の本調査（第１次）は、伊藤裕偉を担当として平成７年８月７日に開始し、同月10日に終了した。最終的な調査面積は90㎡であった。

伝本願寺跡の調査に際しては、以下の方々の御参加があった。また、地元の鈴木喜三郎氏にはひとかたならぬお世話をいただいた。ここにお名前を記して感謝の意を表したい。

（現地調査作業員）

黒田辰郎、田中久一、芝山佳子、田中時枝、
鈴木由起子、押田美和、三浦久代、小林ひさ、

c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下「法」）に等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに通知している。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成７年８月１日付け道建第957号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）

平成７年７月６日付け教文第1629号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成７年11月13日付け教文第222-63号（県教育長通知）

３．調査の方法

a　小地区設定について

今回の調査は、調査面積が狭いことから、小地区設定を行わずに実施した。

b　遺構図面について

調査区全体の平面図は1/20で作成した。また、個々の遺構については個別に実測を行ったものもある。

c．遺構番号等について

遺構は通し番号として付けている。遺物の取り上げもこれに準じた。また、今回検出した遺構は見た目の性格によって頭に付ける略記号を以下により附加した。

ＳＢ……掘立柱建物
ＳＤ……溝
ＳＫ……土坑
ＳＺ……落ち込みなど
ｐｉｔ……ピット・柱穴

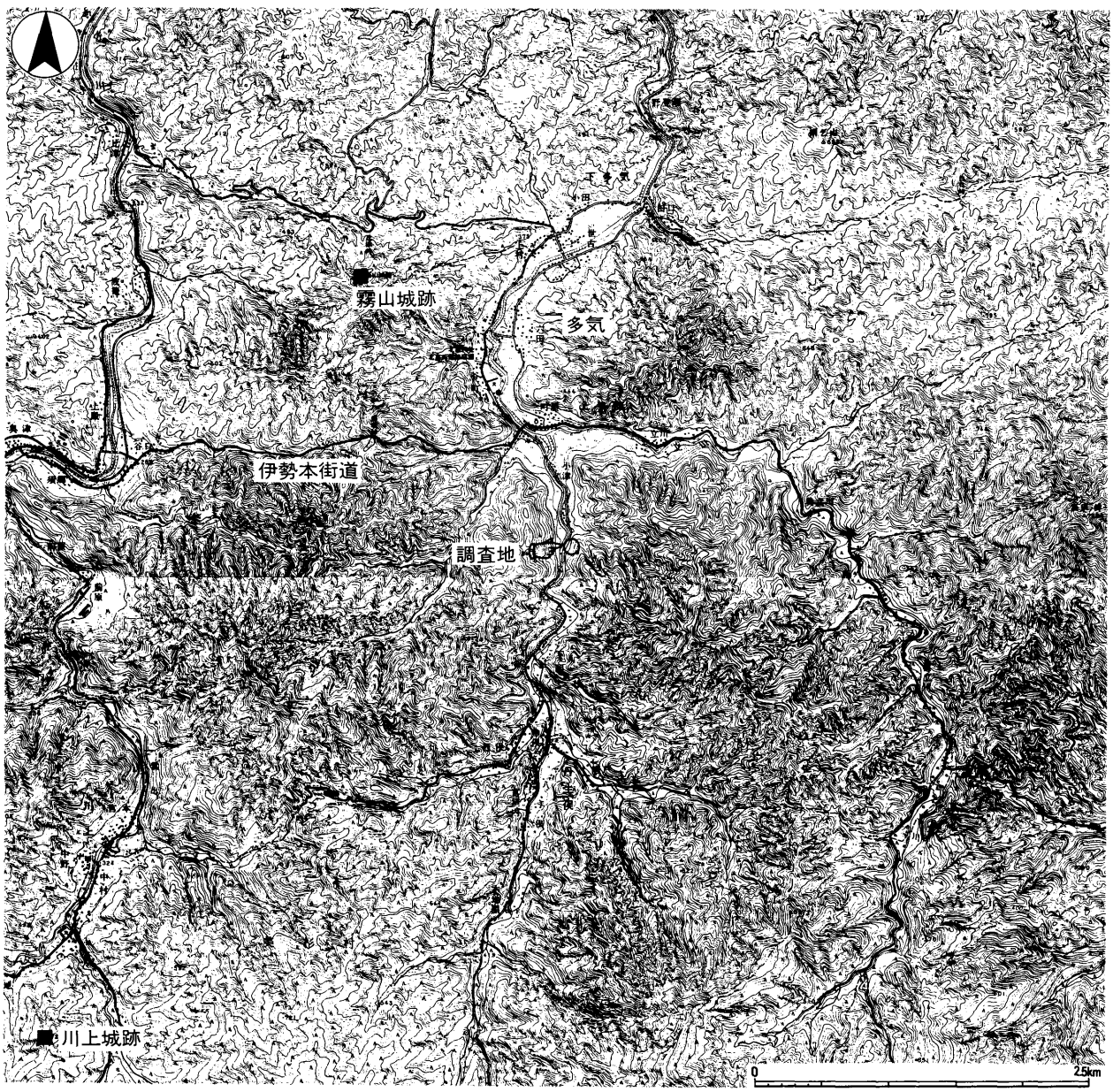


fig. 1　多気周辺地形図（１：50,000）　（国土地理院 1/25,000「伊勢奥津」「宮前」から引用）

II　位置と環境

今回の調査地は、行政的には一志郡美杉村上多気字小津である。この上多気は八手俣川水系によって形成された谷の上流部に相当し、下流部には下多気がある。上多気・下多気は、近世・近代には行政的にはそれぞれが別の村としてあった。しかし、この2地区は地形的に連続し、この2地区で一定のエリアを形成していることは明白である。したがって、上多気・下多気を総称して「多気」の名称を用いることとする。

多気は、八手俣川水系によって形成された盆地状を呈する谷で、平地部の標高は約330～340mである。八手俣川水系は、丹生俣地区から流れる八手俣川本流と、立川地区方面から流れる支流の立川川とがあるが、今回の調査地は立川川と合流する手前の、標高約346mの右岸段丘上に位置する。

多気の歴史的環境については、平成4年度の報告書[①]でほとんど触れているので、ここでは繰り返さない。要点としては、①中世における北畠氏の拠点として機能していたこと、②その期間は14世紀中葉頃から16世紀後葉頃に至る、いわゆる守護・戦国大名クラスの拠点としては全国的に見ても長期にわたること、③北畠氏時代に多様な拠点整備がなされたこと、である。

なお、平成5年度にはナショナル・トラストの調査が行われ、さらに詳細な状況が確認されている[②]。以下では、それも踏まえて平成4年度以降に判明したことを中心に少し触れておく。

平成4年度以降の発掘調査について

a　平成5年度には、現西向院前の田（伝薬師寺跡南）における駐車場造成時に、多数の石仏が確認されている。当該事業に並行して行われた村教育委員会による試掘調査により、この場所にも遺跡の広がっていることが確認された。

b　平成7年5月から6月にかけて、県道の改良事業に先立ち、下多気・上村地区での発掘調査が県埋蔵文化財センターによって行われた。ここからは16世紀を中心とした多量の土器類のほか、金箔装の銅製品や鉄鏃状の遺物など多種多様な遺物が出土している。また、土師器皿には重ね焼き痕のあるものが同一箇所から出土しており、近隣に土師器焼成遺構の存在も想定できる。遺構でも、大形の掘立柱建物やカマドなどの興味深いものがある[③]。

伝誉永寺跡・伝本願寺跡について

今回調査を行った箇所は、伝承地名として「ヨヘイ」と言われている。古賀秀策氏は「誉永」の転訛ではないかと想定されている[④]が、正鵠を射たものであろう。江戸時代に作成されたと考えられる多気を描いた絵図にも「養永寺」の字句が見られる。本願寺については絵図等には見られず、地元の伝承として残るのみである。

なお、伝本願寺跡の南から伝誉永寺跡の西にかけて、少し幅の広い畔道がある（fig. 3）。これは、地元では多気から丹生俣へと通じる、いわゆる「庄司峠越え」の旧街道に相当する部分と伝えられている。

〔註〕

① 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

② 古賀秀策「美杉村・多気の地域文化財」（『美杉村・多気の歴史遺産調査』（財）日本ナショナルトラスト　1994）

③ 越賀弘幸・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』II（三重県埋蔵文化財センター　1996）

④ 註②に同じ

fig. 2　遺跡周辺地形図（１：10,000）　　※「武家屋敷」は確認されているものに限る。

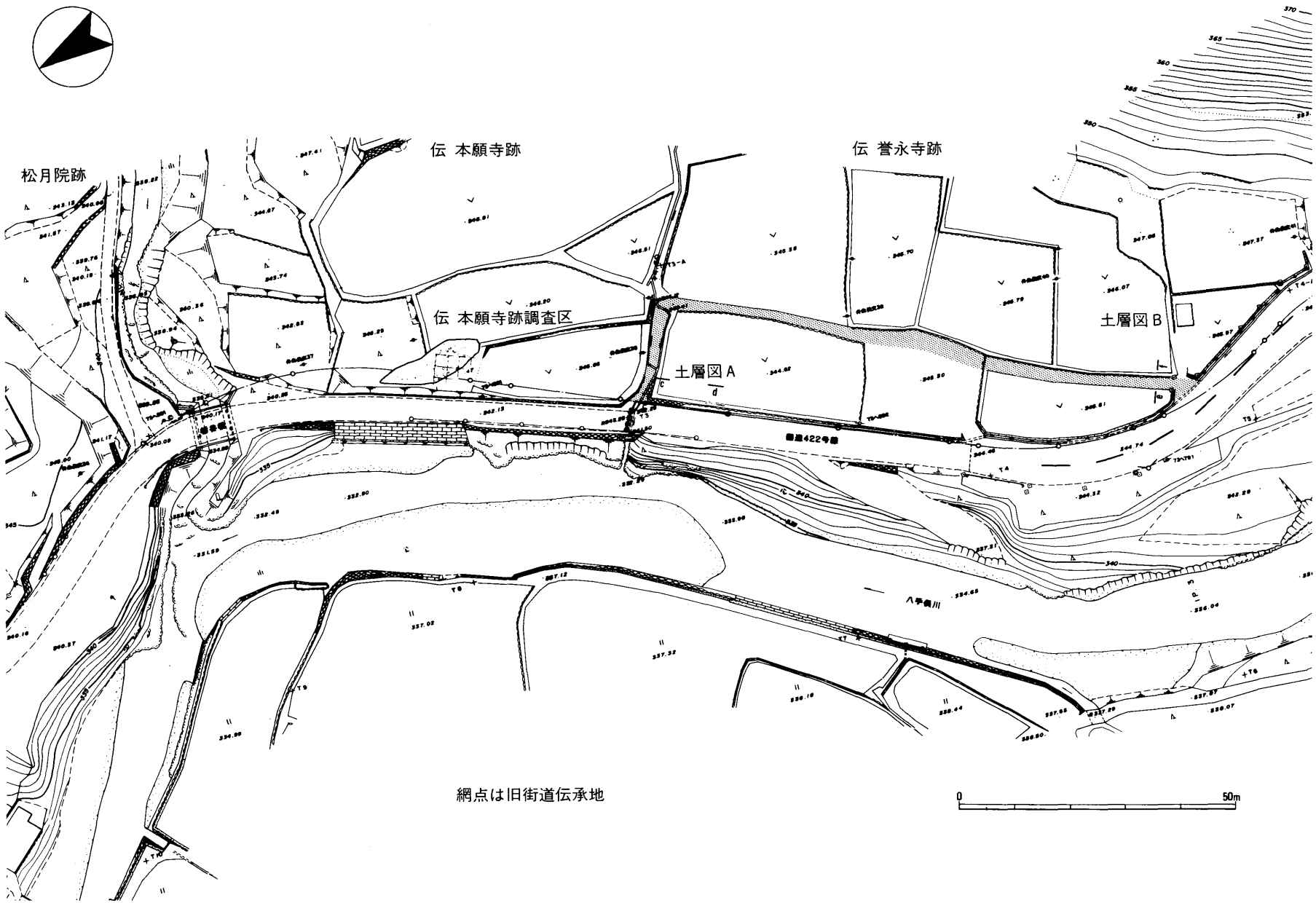


fig. 3　調査区周辺地形図（1：1,000）

III　調査の成果 ― 層位と遺構 ―

1　基本層位

調査区は、標高約345mの段丘上に位置する。ただし、段丘とはいっても河川上流部に形成されたものであるため、丘陵突端部と表現した方が適切かも知れない。

基本層位はfig. 4 ・ 5に示したとおりである。伝本願寺跡・伝誉永寺跡双方とも黄褐色系土を遺構基盤としている。これは、今回の調査区から北へ約700m離れた、平成4年度に調査を行った土井沖地区の状況とほとんど変わらない。なお、縄文時代の遺構についても、原則的にはこの層上面で検出できるため、縄文時代から中世までの間にかなりの削平がなされたものと思われる。

遺構基盤層の上に堆積している褐色～灰褐色系土がいわゆる遺物包含層となる。ただし、この層の包含量は概して少ない。伝本願寺跡調査区の場合、表土からこの層までの間に約0.8mの堆積土層があるが、これは耕作地造成のための盛土のようで、近世以降の形成層と考えられる。

2　伝誉永寺跡の遺構

伝誉永寺跡については、第Ⅰ章で述べたように本調査前の不手際によりほとんど調査できなかったものである。しかし、fig. 4 の土層図に見えるように、何らかの遺構は存在していたものと考えられる。なお、この断面で確認した遺構への遺物包含は、現地では確認できなかった。

伝誉永寺跡として調査ができたのは、現在の国道422号線から東へ10mほど入ったところにある、かつての庄司峠越えの街道とされる道（fig. 3）の一部のみである。ここでも、辛うじて土層断面の確認ができたに過ぎない（fig. 4）。土層は、地境の石積みより西に旧街道に相当する部分があるものの、明確に道としての遺構を確認するには至らなかった。ただ、表土直下にて確認した層（fig. 4、e－f 土層の4層）は良く締まった土で、この部分があるいは道に相当するのかも知れない。そうすると、確認した断面ではおよそ1.5mの幅となる。中世とはいえ、幹線道の幅としては少し狭いようにも思われる。

3　伝本願寺跡の遺構

伝本願寺跡調査区では縄文時代と南北朝～戦国時代（以下、「中世」）の遺構を確認した（fig. 5）。以下、主なものについて記述する。

a　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構には、明確なものとしては土坑がある。また、調査区南端部で確認した焼土も、おそらくこの時期のものと考えられる。

土坑ＳＫ1　調査区の中央やや南寄りで検出した遺構である。淡褐色系砂質土の埋土で、中世の埋土とは明らかに異なっていた。検出面からの深さは約0.4mで、断面皿状を呈する。埋土中からサヌカイト片が出土している。

b　中世の遺構

中世の遺構には、掘立柱建物・土坑・落ち込み・溝のほか、多数のピットがある。

掘立柱建物ＳＢ7（fig. 5）　調査区南部で検出した遺構である。東西2間（約4.2m）以上、南北3間（約6.5m）以上の総柱建物と思われる。西部および南部は、調査区外に広がる。建物の南北方向は、N25°Eである。柱間は、東西方向が約2.1m（1尺を30.30mとすると7尺）、南北方向が約2.4mと2.1m（同8尺と7尺）である。棟方向は不明である。

出土遺物がなく、所属時期は不明とせざるを得ないが、東側にある溝ＳＤ5とほぼ平行であることから、それと同じ時期の可能性がある。

土坑ＳＫ2（fig. 5）　調査区中央部にて検出した遺構である。直径1.4mの円形を呈し、検出面からの深さは0.4mである。黒色系土の埋土で、中には土師器皿が多量に投棄されていた。出土する土器類に土師器小皿を含まないという、極めて特徴的なあり方を示している。土師器皿の形態から、14世紀前半頃の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ3　調査区南部で検出した遺構である。

掘立柱建物ＳＢ７に取り込まれるようにあるが、時期的には異なるものと考えられる。灰褐色系土を埋土とし、陶器椀（山茶椀）や土師器皿類を含んでいた。土器類からは14世紀前半頃の遺構かと考えられる。

溝ＳＤ５　調査区南部で検出した遺構である。縄文時代かと思われる焼土を切っている。幅約0.8m、深さ約0.2mで、断面逆台形状を呈する。深さとしては南部ほど深くなっている。南部および北部にかけて、さらに続いているものと考えられる。先述のように掘立柱建物ＳＢ７の方向とよく合う。出土した土器類は、16世紀中葉頃のものである。

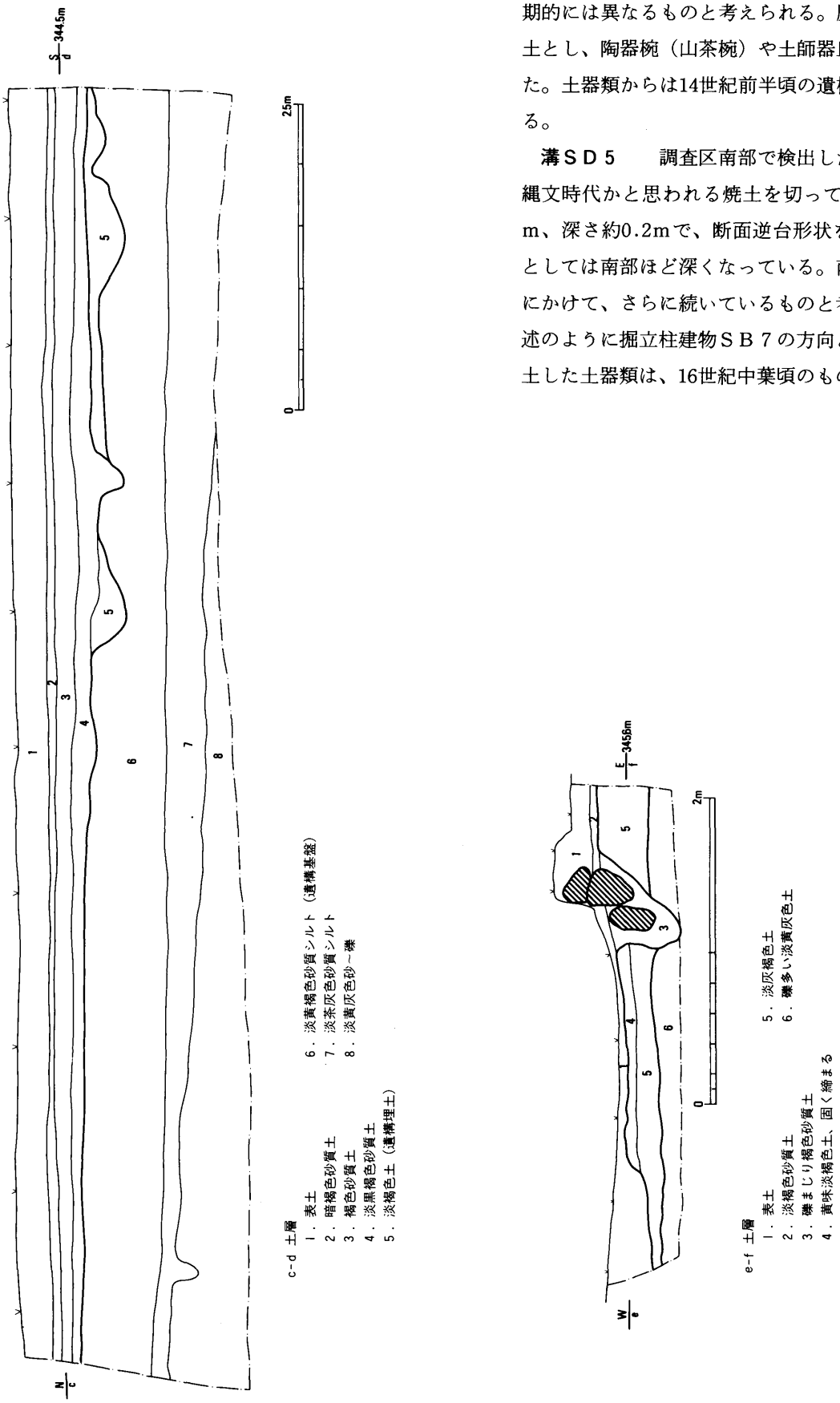


fig. 4　伝誉永寺跡調査区土層（土層位置はfig. 3）

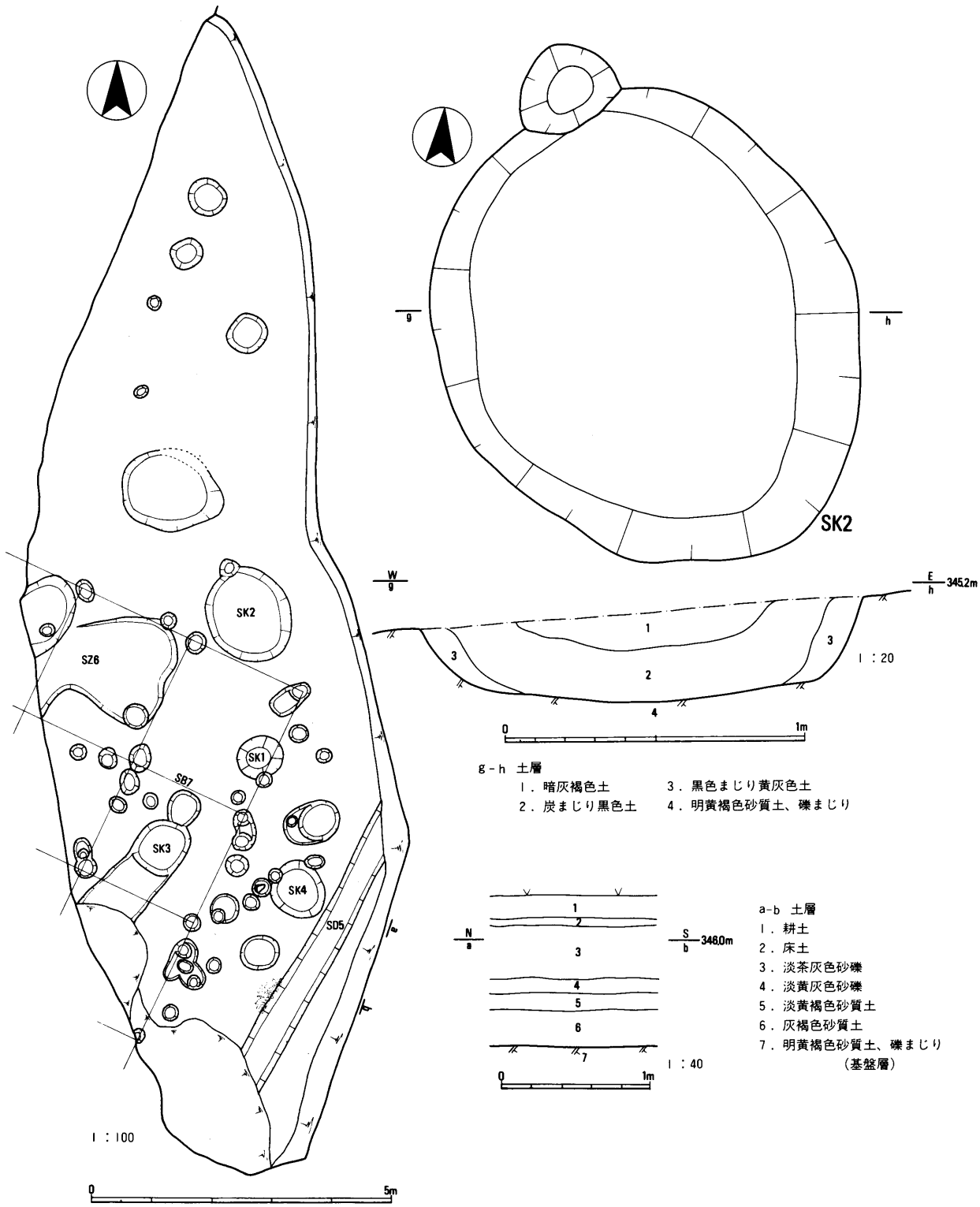


fig. 5　伝本願寺跡調査区平面・土層断面図及び土坑ＳＫ２平面・土層断面図

Ⅳ　調査の成果 ― 出土遺物 ―

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱に換算して２箱と少ない。しかし、少ないながらも各時代の特色ある遺物が確認できた。以下、それぞれの遺物について概要を記す。個々の詳細は遺物観察表（tab. 2）を参照していただきたい。

1　縄文時代の遺物（１）

縄文時代の遺物は、包含層中から出土したものが数片ある。そのうち、図示可能なのは深鉢と考えられるもの（１）のみである。内面に炭化物が付着する。単節Ｌの斜縄文を施文し、その後に細めの沈線で区画する。区画外は縄文地が磨り消されている。後期の範疇で把握できるものであろう。

2　中世の遺物（２～12）

土師器類・陶器類・磁器類（青磁）および鉄製品類がある。

鉄製品類（２～４）

２と３は釘、４は何らかの工具ではないかと思われる。４は一見鉄鏃状を呈するが、刃に相当する部分が鋭利でない。

土師器類（５～９、11・12）

土師器類は、全て南伊勢系土師器[①]の範疇で把握できるものである。

５～８はＳＫ２から出土したものである。５は重さ約64ｇである。これを基準にすると、ＳＫ２からは土師器皿が重量にして約1,614ｇ出土しているので、1,614÷64＋４（図示分）＝29.218....となり、ＳＫ２には最低30枚の土師器皿が投棄されていたことになる。

９も形態としてはＳＫ２の一群と同じもので、時期的にも大差ないものと考えられる。

11は鍋で、第３段階ｂ型式に相当し、15世紀前葉頃のものと考えられる[②]。

12は皿で、Ｄ系統に属する[③]。16世紀中葉頃と見ておけば大過ない。

陶器類

常滑産と思われる甕片がＳＫ２から２片出土しているが、図示できない。図示できるのは10の椀のみである。

10は瀬戸産の山茶椀と思われるものである。藤澤良祐氏の編年[④]では第８型式に相当しようか。

磁器類

pit１から青磁椀の破片が出土しているが、図示できない。

〔註〕

① 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehi story』vol.1　1990）

② 註①に同じ

③ 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

④ 藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶椀窯」（『尾呂』瀬戸市教育委員会　1991）

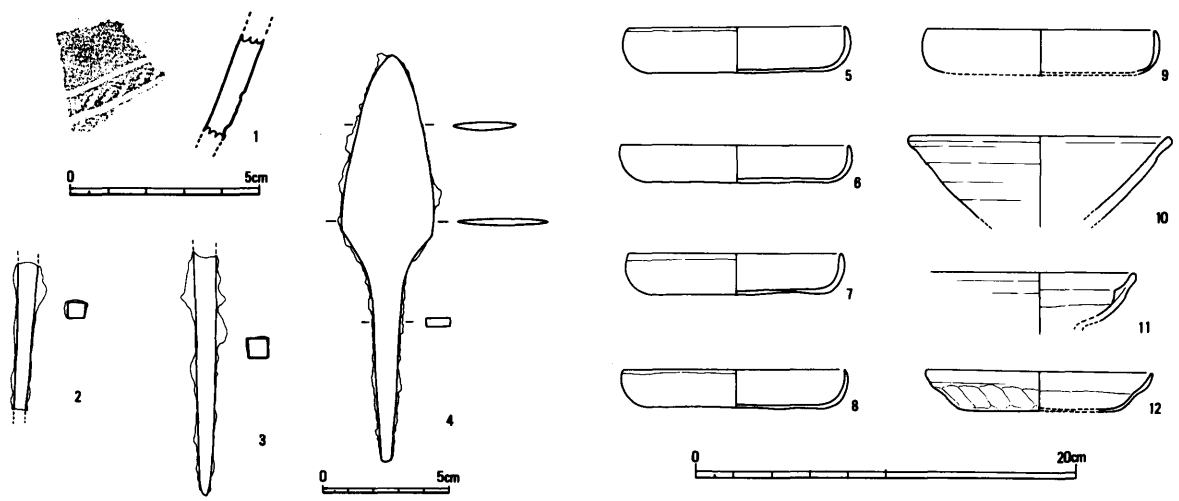


fig. 6　伝本願寺跡調査区出土遺物（１は１：２，２～４は２：３，他は１：４）

番号	実測番号	器種等	出土グリッド	遺構・層名など	取上時の名称	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	1-2	縄文土器 深鉢？		検出中	検出中	—	外：縄文→沈線→ミガキ 内：ミガキ	粗0.5～2㎜の小石	良好	淡褐	体部片	内面に炭化物付着
2	1-11	鉄製品 釘		ＳＫ３	ＳＫ３	(幅)0.8					上下端欠損	
3	1-12	鉄製品 釘		ｐｉｔ２	ｐｉｔ２	(幅)0.9					上端欠損	
4	1-1	鉄製品 用途不明		ｐｉｔ１	ｐｉｔ１	(長)16.0 (幅)3.8					完存	
5	1-8	土師器 皿		ＳＫ２	ＳＫ２	(口)11.6 (高)2.3	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	暗灰黄	ほぼ完存	重さ64ｇ（推定）
6	1-3	土師器 皿		ＳＫ２	ＳＫ２	(口)12.1 (高)2.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	黄灰	口縁1/2	
7	1-4	土師器 皿		ＳＫ２	ＳＫ２	(口)11.4 (高)2.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁3/4	
8	1-5	土師器 皿		ＳＫ２	ＳＫ２	(口)11.8 (高)2.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	暗灰黄	口縁2/5	
9	1-7	土師器 皿		ＳＫ３	ＳＫ３	(口)12.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	灰白	口縁1/8	
10	1-6	陶器 椀		ＳＫ３	ＳＫ３	(口)14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2㎜の小石	堅緻	淡黄	口縁1/8	山茶椀（瀬戸産？）
11	1-8	土師器 鍋		重機掘削	重機掘削	(口)—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	灰黄褐	口縁部片	外面に煤付着
12	1-10	土師器 皿		ＳＤ５	ＳＤ５	(口)12.0 (高)2.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密0.5～1㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	

tab. 1　伝本願寺跡調査区出土遺物観察表

Ⅴ　調査のまとめと検討

災害復旧工事に先立って行われたこの調査は、面積としては90㎡という、極めてわずかなものであった。狭い面積と多気盆地の最奥部という状況から、調査前にはほとんど何も確認できないのではないかと予想したほどである。しかし、結果は予想を大きく上回るものであった。ここでは今回の調査によって得られた新たな事実をもとに、わずかばかりの言及を行う。

1　縄文時代の遺構・遺物について

縄文時代に相当する遺構としては、土坑ＳＫ１が確認できた。また、焼土も恐らくは当該時期のものだろう。遺物としては、後期に相当するものが数点認められた。焼土の存在からは、竪穴住居の残骸ではないかと想定できる。後期の竪穴住居は平成４年度に行った土井沖地区の調査でも見つかっており[①]、多気の盆地内に当該時期の遺跡が広く、しかしまばらに展開していることが予想される。

2　中世の遺構・遺物について

a　確認された遺構・遺物について

今回の調査では、14世紀前半前後と16世紀中葉頃の遺構・遺物が見つかった。14世紀中葉には、多気にとっては北畠氏の入部という画期的な時期[②]を迎えることとなる。このような時期に、多気盆地の最奥部にあたる当地に遺跡の展開が見られるという事実は、今後の北畠氏・多気の空間構造を考えていく上で極めて重要な問題を提起しよう。

ＳＫ２の遺物については、土師器皿に限定された投棄という点で特殊といえる。同じような時期の土師器皿類の大量投棄という現象は、玉城町・岩出遺跡群[③]でも見られるが、小皿類も含めた投棄となるのが常である。土器の大量廃棄という行為の中における限定器種のみの投棄という現象の位置づけも、今後注意を要する。

b　伝誉永寺・伝本願寺について

今回の調査区は、伝誉永寺跡と伝本願寺跡の範囲である。平成２年度に確認された大蓮寺跡や法光寺跡[④]のように、この２寺院でも寺院に係わる何らかの遺構の存在が期待されたが、今回の調査では積極的にそれといえるようなものは認められなかった。この理由としては、今回の調査区が、寺院想定地の西端に相当することも大いに関連すると思われる。

以上、今回の調査で得られた事実から想起される若干の問題点等について考えてきた。伝本願寺跡の調査は来年度以降にも継続する。その調査で新たな事実の判明が期待されるのであるが、開発＝遺跡の破壊と引換えになるのは残念という他ない。

〔註〕

① 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

② 註①に同じ

③ 伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

④ 註①に同じ

付編　聖光寺境内出土の遺物について

1　はじめに

ここで報告する遺物は、平成７年に上多気字谷町地内に所在する聖光寺の駐車場造成の際に出土した遺物である。遺物は、整理箱にして１箱ほどの出土が見られた。

聖光寺の西は「市場沖」の字名が残る場所であり、北畠氏時代に市場のあった場所と想定される。また、聖光寺自体もその前身が北畠氏時代にまで遡る可能性を持つものである。[1]

このような位置づけが可能な聖光寺境内出土の遺物は、多気を考慮していく上で重要といえる。以下、出土遺物について概要を記していく。個々の詳細は遺物観察表（tab.２）を参照していただきたい。

なお、ここに貴重な資料が紹介できるのは、工事に際し、出土遺物を丹念に採集された鈴木喜三郎氏の御尽力の賜物である。氏の御尽力と、紹介に際して快諾を得たことに対し、改めて感謝いたします。

2　出土遺物（fig.８）

出土遺物には、縄文時代、弥生時代、中世戦国期のものがあるが、戦国期のものが圧倒的に多い。

１は縄文土器である。内外面ともに施文は無い。胎土中に繊維を含む。早期末頃のものと考えられる。

図示不能であるが、弥生土器がある（ＰＬ.６の９）。甕の底部付近で、外面をヘラミガキ、内面をハケメとナデで調整する。中期のものと思われる。

２～８は中世戦国期のものである。２～４は土師器皿である。全て南伊勢系土師器として認識される。２はＢ系統小皿、３・４はＤ系統皿・大皿である。[2]２の口縁部には油煙痕があり、灯明皿に用いられていたものと考えられる。３の内面には紅状の付着物が認められる。

５は陶器の天目茶椀である。瀬戸産のものと思われる。外面は２次的な熱を受けており、当初の釉が変形している。

６は中国・明代の染付椀である。外面には波涛状の模様を、内面口縁部付近には雷文を施している。

７は陶器の小形練鉢で、常滑産と考えられる。

８は土師器の鍋である。南伊勢系のもので、第４段階ｃ型式に相当する。[3]16世紀前葉頃のものである。外面には煤が付着する。

この他に、瀬戸産大窯期の擂鉢・盤、常滑産甕、土師器十能などがあるが図示できなかった。

3　おわりに

今回紹介した資料から提示される事実と問題について、若干触れておく。

縄文時代の遺物について

今回紹介した資料中に、縄文時代早期末頃と思われる繊維土器が含まれていた。縄文早期の遺物は多気では細田遺跡（下多気字中之世古）で確認されているが、聖光寺境内でも確認できたことから、多気盆地内に広く点在している可能性が想定される。また、美杉村が行った詳細分布調査の結果では、聖光寺付近でサヌカイトの剝片が多く出土していることが判明しており[4]、聖光寺付近に当該時期の良好な遺跡が存在する可能性がある。

弥生時代の遺物について

中期の遺構は、八手俣川を挟んで対岸の土井沖遺跡で確認されているが[5]、遺物の量はここでも決して多くなかった。盆地内全体を生業範囲とする小集団の存在が想定できようか。

中世の遺物について

中世の遺物としては、その多くが16世紀前葉頃に比定できるものである。これが当時の聖光寺に関連するものなのか、あるいは「市場」との関連なのかは判らない。しかし、６のように極めて精緻な染付椀が含まれていることから、この付近にかなり重要な建物等の施設が存在していたものと想定できる。

以上、現聖光寺境内で出土した遺物の紹介を行ってきた。これらの遺物から、多気地区内には広く北畠氏時代の重要な遺跡が包蔵されていることが明らかとなった。さらに、少量とはいえ縄文早期や弥生中期の遺物の存在は、当時の多気がどのような空間としてあったのか、興味を引かせる。多気という空

間の歴史的な重要性は、この僅かな遺物からも窺うことができる。

〔註〕

① 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993）

② 註①に同じ

③ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol. 1 1990）

④ 皇學館大学考古学研究会『美杉村の遺跡』（1995）

⑤ 註①に同じ

fig. 7 聖光寺位置図（1：2,500）

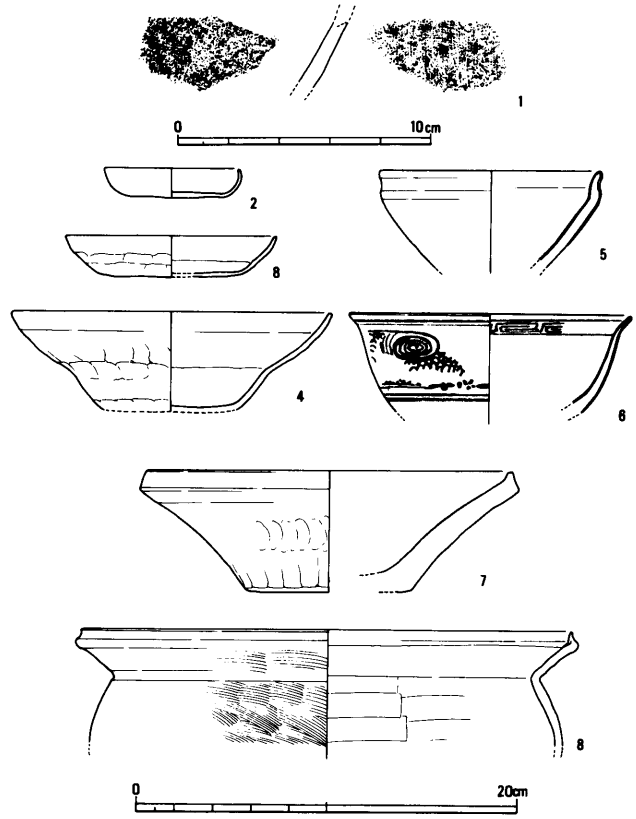


fig. 8 聖光寺境内出土遺物（1は1：3，他は1：4）

番号	器種等	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	縄文土器 深鉢	—	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	淡黄灰	体部片	胎土中に繊維を含む
2	土師器 小皿	(口)7.0 (高)1.6	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡茶灰	完存	
3	土師器 皿	(口)11.2 (高)2.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	口縁端部に油煙痕付着
4	土師器 皿	(口)16.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁1/5	内面に紅状付着者
5	陶器 天目茶椀	(口)11.8	外：ケズリ→施釉 内：施釉	密0.5～2㎜の小石	堅緻	淡白灰	口縁1/5	釉は二次的被熱を受けて淡黄灰色に変色 瀬戸産
6	磁器 椀	(口)14.8	外：染付・施釉（波濤文） 内：染付・施釉（雷文）	密	堅緻	釉：淡青～	口縁1/5	中国産染付
7	陶器 練鉢	(口)20.0 (高)6.4	外：オサエ→ヨコナデ 内：ナデ	密0.5～3㎜の小石	堅緻	淡赤褐	口縁1/5	常滑産
8	土師器 鍋	(口)26.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	密0.5～2㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁1/5	外面に煤付着
9	弥生土器 甕	—	外：縦方向のミガキ 内：ハケメ・ナデ	粗0.5～3㎜の小石	良好	淡褐	体部片	外面に煤付着

tab. 2 聖光寺境内出土遺物観察表

報告書抄録

ふりがな	たげいせきぐんはっくつちょうさほうこく3
書名	多気遺跡群発掘調査報告Ⅲ
副書名	一志郡美杉村上多気字小津所在、伝誉永寺跡・伝本願寺跡の調査
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	137
編著者名	伊藤裕偉
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　05965（2）1732
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
多気遺跡群 伝誉永寺跡 伝本願寺跡	三重県一志郡 美杉村上多気 字小津	24406		34° 30′ 10″	36° 18′ 35″	19950807～ 19950810	90	国道422号線道路災害復旧工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伝誉永寺跡	寺院跡	戦国		土師器	
伝本願寺跡	寺院跡	縄文後期	ピット・焼土	土器	焼土は竪穴住居跡か？
	集落	南北朝	土坑	土師器・陶器	
		戦国	掘立柱建物・溝	土師器・鉄製品	
付編 聖光寺境内出土の遺物について		縄文早期 弥生中期 中世戦国期		縄文土器・弥生土器 中世土器類	

Plate

北部土層（西から）

旧道土層断面（南から）

調査区遠景（北西から）

調査風景

全景（南から）

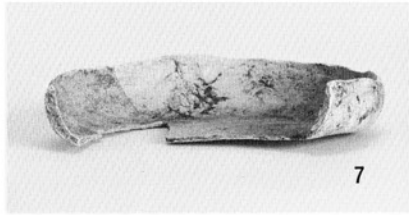
全景（北から）

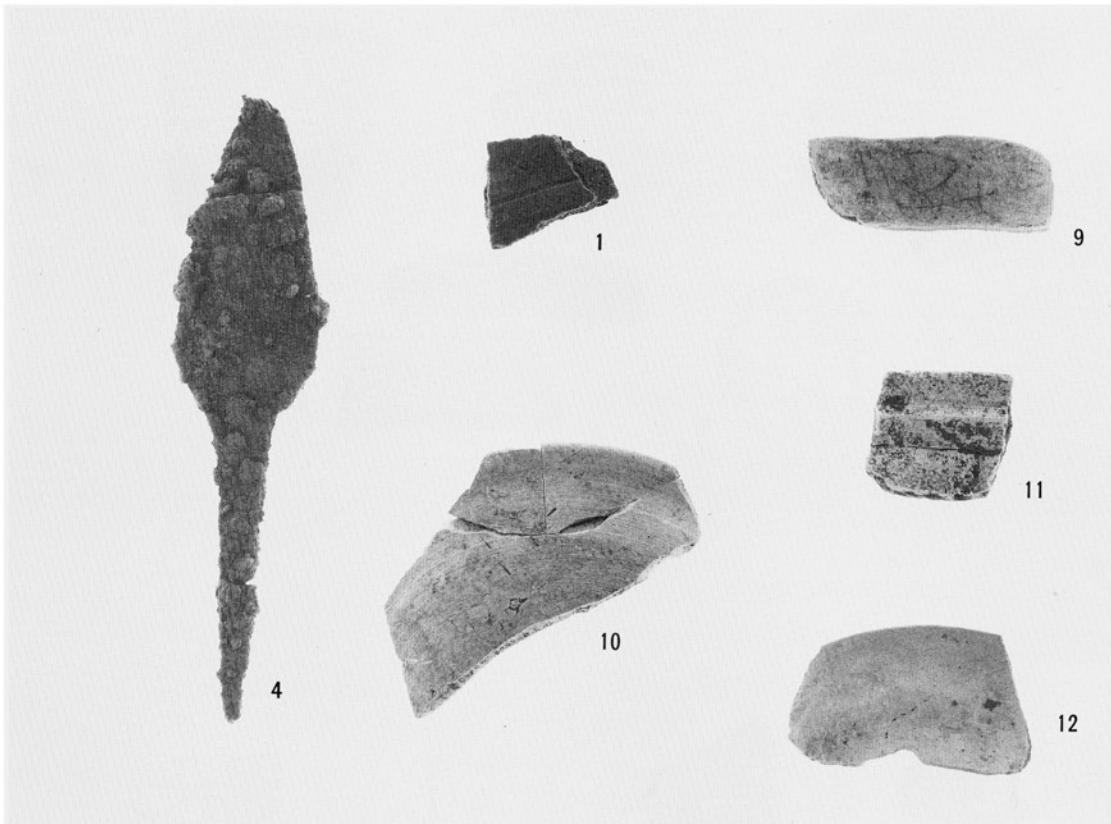
伝本願寺跡調査区　遺構２

ＳＫ２（南から）

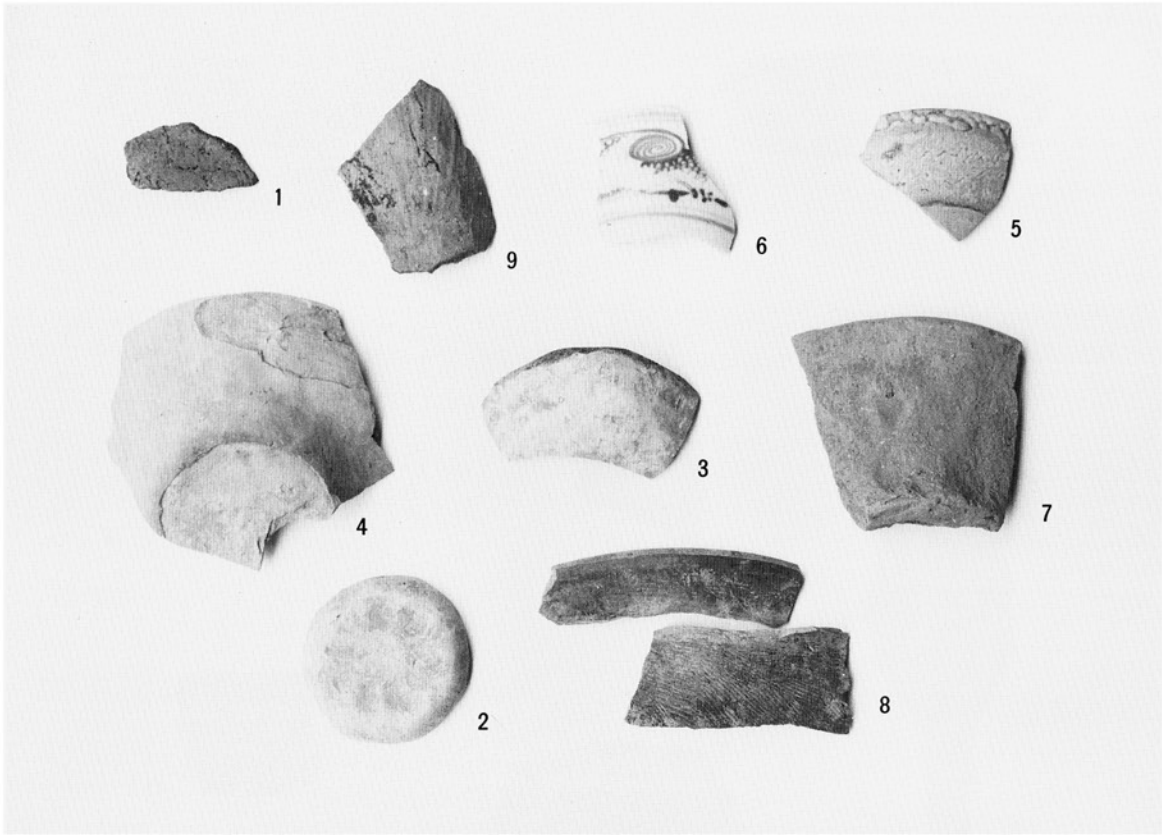
ＳＫ２　遺物出土状況（南から）

5

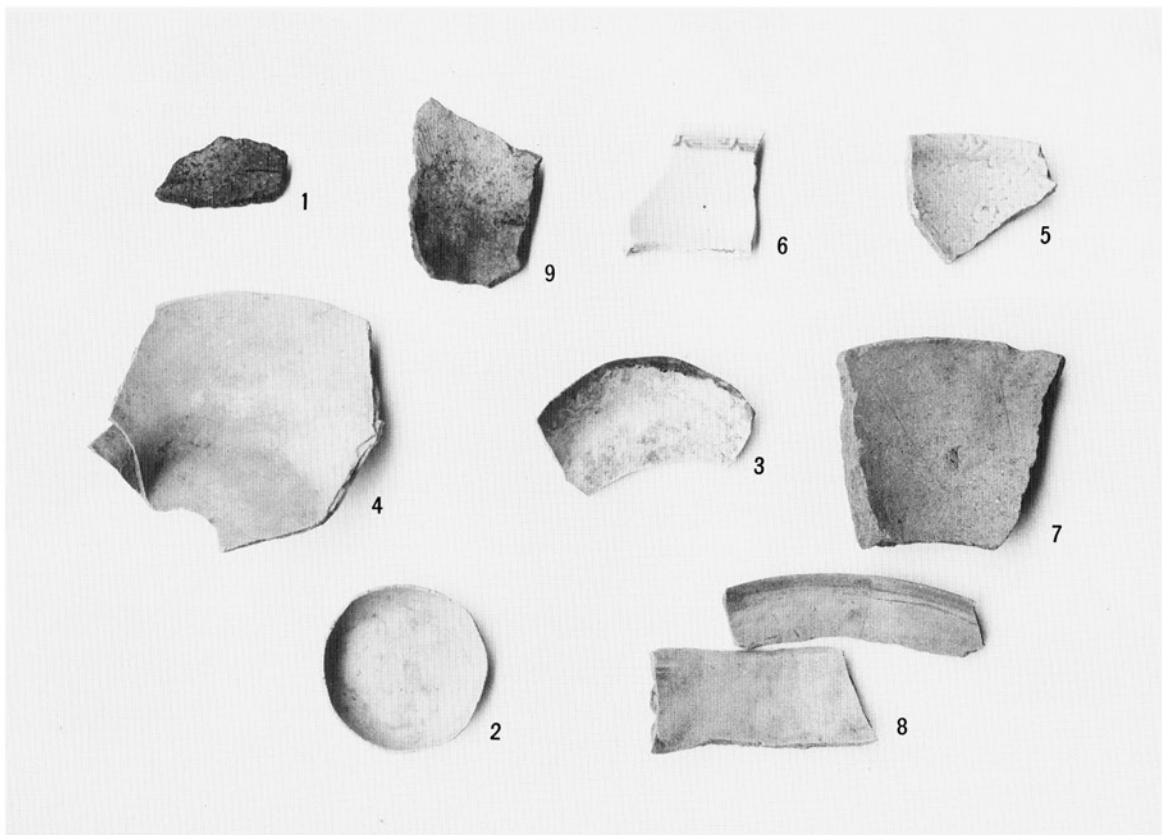

7


4
1
9
11
10
12

聖光寺境内出土の遺物



外　面



内　面

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 137

多気遺跡群発掘調査報告III

～一志郡美杉村上多気字小津所在、
伝誉永寺跡・伝本願寺跡の調査～

1996年3月　発行

編集発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷者　オリエンタル印刷株式会社